

中学校 英語

英語科における自分の考えを書く力を高める指導法の工夫
—整理・結合ブレインストーミングシートと評価シートの併用の有効性について—

東北町立上北中学校 教諭 外崎 綱一

要 旨

英語で自分の考えを書く力を向上させるために、1～3年生までの教科書を用いて、オリジナル文を3文書させる活動を行った。その過程で、本研究の手立てとして定めた、整理・結合ブレインストーミングシートと評価シートの二つを併用して生徒に講じた。その結果、自分の考えを論理的に読み手に書き伝える力の向上が見られ、それらの手立てを併用することの有効性が証明された。

キーワード：中学校 英語 書くこと ブレインストーミング 評価 自律的学習者

I 主題設定の理由

平成26年度青森県立高等学校入学者選抜前期選抜学力検査（青森県学力検査と呼ぶ）を考察した際、聞くことよりも「読むこと・書くこと」において生徒の能力差が大きいことが分かった。同様に本校でも「読むこと・書くこと」を苦手とする生徒は非常に多い。本校3年生を対象にしたアンケート結果からは、50パーセントを超える生徒が「読むこと・書くこと・聞くこと・話すこと」の4技能の中の「書くこと」が苦手であると回答している。理由として、単語力の欠如、主語と動詞及び動詞と結び付く名詞や句の関係性への知識不足、文章を構成するための言語知識の希薄さなどが考えられ、英文を作成する際に立ち塞がる壁は生徒たちにとって大きなものである。

中学校学習指導要領外国語編（H20.9）では「第2章 第9節 エ 書くこと」で「(オ)自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと」という指導内容が記述されている。つまり、自分の考えを論理的に読み手に書き伝える必要があるということについて言及している。そこで本研究では、教科書の既習事項を用いた英文を書く指導を行う際に、次の二つの手立ての併用を通して、生徒の書く力を伸ばしていきたいと考えた。一つ目は、整理・結合ブレインストーミングシートで、英文を書く際の適切な表現や語彙を考えさせ、思い付く単語をカテゴリーごとに書き出させることである。二つ目は、評価シートを用いた相互評価を通し、達成度の評価を行わせることである。

つまり生徒たちに言語の使用場面や使い方を習得させ、それらを活用するための言語運用力を付けさせることで書く力を高め、自律的学習者としての学習形態の確立を促していきたいと考え、本主題を設定した。

II 研究目標

英語で自分の考えを書く力を向上させるために、整理・結合ブレインストーミングシートと評価シートの併用が有効であることを明らかにする。

III 研究仮説

自分の考えを書かせる指導において、教科書の既習事項を用いた書く指導をする際に、整理・結合ブレインストーミングシートと評価シートの二つの手立てを取ることによって書く力が高まるであろう。

IV 研究の実際

1 研究における基本的な考え方

(1) レベル分けされた英文について

自分の考えを英文で書くためには、学んだ知識を、場面状況に応じて使いこなす力が必要である。本校生徒の書く力を考えると、単語の意味や形が知識として身に付いていても英文が書けないという、活用力不足が事前テストから明らかとなった。そこで生徒たちの基礎力定着を促すために、教師が身に付けさせたい英文をレベル分けして生徒に与えることにした。レベル分けの際は、教科書巻末（New Horizon Book 3 pp. 124-125（株）東京書籍 平成23年2月4日検定済）の応用編「1～3年間の基本文のまとめ」を一枚のプリントにし、短時間で振り返られるようにした。それを英文レベル分けシートと呼ぶ。レベル分けの段階はLevel. 1～4とし、中学校1年生で習う文法事項をレベルの低いもの、3年生のものをレベルの高いものに設定した。土屋（1981）は「制限作文を書かせるためには、書かせる文や文型について、耳で聞いてわかり、口で言え、目で読める状態にしておくことが必要である。これらが、不十分であると効果が薄れるだけでなく、生徒は書くことに対して重荷を感じるようになる」と述べている。そのため、検証授業前にレベル分けされた英文を声に出して読ませる時間を設けた。そして、本研究で英文を書かせる

際に、生徒に制限作文として状況を捉えさせながら書く力の育成を目指したい。

(2) 本研究での主たる書く活動について

本研究での主たる書く活動は、教科書本文の文と文の間に、オリジナル文を3文書くことである。

太田(2012)は「1度目の出会いでは習得しないのですから、2度目・3度目の出会いを仕掛ける授業設計をしましょう。1度目で出会わせた文法事項にまた触れたり使ったりする機会を作ることです。「今までに習った文法事項から選んで使う機会」を作るのがポイントです」と述べている。そのため、使う単元は1～3年生までの教科書の英文をそのままプリントにして扱うことにした。既習事項を用いたのは、生徒の学習内容への抵抗感を減らし、スムーズに英語を学ばせることを意図したためである。書く活動では文脈を意識させオリジナル文を組み込ませることで、与えられた場面にふさわしい語彙や文を考えさせたい。また、英文を書かせる際は、間違った表現を訂正し、その表現を意識的に使うようにさせた。そうすることで、知識の習得としてのインプットと、活用力としてのアウトプットの往復を促し、その結果、言語記憶の深化とともに、場面に適した英文が書けるようになっていくと考えたためである。

(3) 整理・結合ブレインストーミングシートと評価シートの活用について

ア 整理・結合ブレインストーミングシートについて

生徒に英文を書かせる際、一定の制限を設けたブレインストーミングを用い、語彙や句を4項目に分類させた。本研究では、その作業を整理・結合ブレインストーミング、用いるシートを整理・結合ブレインストーミングシートと呼ぶこととする。事前アンケートの結果から、書きたいことはあっても文章にできないと考えている生徒が多いため、そのシートで思考の活性化を図り、語順を意識させながら、英文を書く材料を精選させて与えようと考えた。

イ 評価シートについて

本研究で用いる評価用紙を評価シートと呼ぶこととし、その評価シートを用いた相互評価を通して達成度の評価をさせた。田中(2003)は「生徒が自律した学習者として、自己表現力を自分の力で伸ばしていくためには、教師からの評価を受けるだけでなく、自分自身で評価する力を育成していくことが重要です」「授業の中で自己表現力を育成していくためには、他者を評価してみることも大切です」と述べている。そこで、自己評価で得られる活用力の向上や目標の達成度を点数化し、点数では計ることが難しい成長や欠点を記述評価で具体化させる。つまり、生徒に評価力を付けさせることで自分の学習を客観的に捉えさせ、次なる目標設定を促させるという波及効果を期待した。このように生徒が自分で書いた英文のフィードバックができ、自律的学習者の第一歩となるように評価シートを用いた。

(4) ペアでの音読について

教科書の内容を復習する際は音読を用いた。文字を見て読むだけの音読練習ではなくRead & look upで意味の塊を意識した音読練習を行わせた。look upで顔を上げて音読する際は、教科書のページの写真をまとめた図1拡大模造紙に目を向けさせ、言語の使用場面のイメージが記憶として残るような環境を授業内に設定した。竹下(2012)は「学習指導要領解説の外国語編には「読むこと」において「話の内容や聞き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりなどすることができるよう、書かれた内容や考え方などをとらえること」と記述されている。このことは1文ごとの意味理解だけでなく、パッセージ全体を理解し、さらに自分と関連づけながら読むというactive-readingまたはcritical-readingの読み方が期待されていることを意味している」と述べている。本研究では、各授業の最後にオリジナル文を組み込んだ英文を、ペアになって読み合わせた。英文を感情を込めて音読させ「書くこと」という一技能を踏まえて「読むこと」という二つ目の技能も高めていけるような、統合的な指導を行おうと考えた。

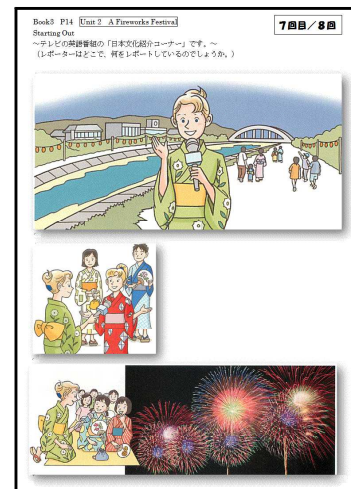


図1 拡大模造紙

2 研究内容

(1) 教科書を基にした記述シートについて

自分の考えを書かせる際に使用した教材は、先述したとおり1～3年生までの教科書の本文をそのままプリント形式にしたものである。そのプリントを、「記述シート」と呼ぶこととし、図2に示す。使用した教科書のページは教師が選択した。以下のア・イは記述シートの使い方と、採点基準である。

ア 記述シートの使い方

記述シートは、教科書本文の文と文の間に、自分の考えた英文を書かせるために用い、各授業の目標を「オリジナル文を3文書く」とした。上位の生徒のために、文と文の間に2文以上書いてもそれらを1文とカウントし文章を増やしていくことも可能にさせた。

本研究の主たる活動は英文を書くことであるが、生徒が書いた英文の正誤判断を教師一人で行うことは、授業内では時間的に難しい。そのため、教師が生徒の英文の正誤判断をし、正しい英文を用いた生徒や英文を直し終わった生徒たちをStudent-teacherにし、他生徒の英文の正誤判断をさせた。英文に間違いがあった場合は、消して訂正させるのではなく、赤ペンで直すか欄外に再度文章を書かせるようにした。太田(2012)は「言葉を使ったことで文法・語彙の必要性がわかる。Outputでギャップが生まれたときが、文法・語彙指導のチャンスです」と述べている。そのため、記述シートのミス第6時と第11時のテストに向けての自分の弱点克服の要素とさせ指導を行った。

イ 記述シートの採点基準について

授業で用いた記述シートを毎時間回収して、教師が英文の最終確認を行った。その際、レベル分けされた英文シート図3に従って生徒の英文の採点を行い、文法事項にミスがあれば、点数を加算しなかった。採点の詳細は、以下のとおりである。

- i) Level. 1 の文法事項の使用で 1 点加点 (上限 3 点)
- ii) Level. 2 の文法事項の使用で 1 点加点 (上限 3 点)
- iii) Level. 3 の文法事項の使用で 2 点加点 (上限なし)
- iv) Level. 4 の文法事項の使用で 3 点加点 (上限なし)

点数の上限を設定することで Level. 1 や 2 だけではなく多く文に触れられるようにした。また、「would like to」の練習のために、Level. 4 にメモで追加設定させた。高いレベルに設定することで使用頻度が増すのではないかと仮定したためである。事後のアンケートからは、生徒が評価項目の達成のために、「would like to」を意識的に使おうとしたことが分かった。

<input type="checkbox"/> It is mine. 1:08 <input type="checkbox"/> Do you know him? / Do you know her? 1:08 10 形容詞, 副詞 <input type="checkbox"/> Math is interesting. 1:04 <input type="checkbox"/> Math is not easy. 1:04 <input type="checkbox"/> I study hard. 1:04 Level. 1 (1点:1で上限3点) <small>3人称単数現在の「s」に注意しよう。</small>	<input type="checkbox"/> This movie is the most interesting this year. <input type="checkbox"/> Becky is my best friend. <input type="checkbox"/> They fly as high as a bird. Level. 3 (2点) Level. 4 (3点) 14 受け身 <input type="checkbox"/> The group is loved by many people. <input type="checkbox"/> Was sign language used in the music — Yes, it was. / No, it was not. 15 現在完了形 <input type="checkbox"/> I have lived in Japan for three years.
<input type="checkbox"/> I am going to visit Yakushima tomorrow. 2:02 8 未来表現	

図3 レベル分けされた英文シート

オリジナル文を組み込んでみよう 7日目/8日目

Book 3 P14 Unit 2 A Fireworks Festival
Class. No. Name.

Starting Out ~テレビの英語番組の「日本文化紹介コーナー」です。
(レポーターはどこで、何をレポートしているのでしょうか。)

①Hello, everyone. ②This is your *reporter, Emily Walker.
③I'm here at the Midori River. ④A *fireworks *festival will be *held tonight.
⑤*I've lived in Japan for three years,
and I've loved Japanese fireworks *since I saw them *for the first time.
(注) reporter レポーター fireworks 花火 festival 大会 held hold 開くの過去分詞
we lived (have)過去分詞 ずっと~している (現在完了 継続用法)
since ~以来、~から for the first time 初めて

9) 文と文の間にオリジナル文を3文書こう。(1つのアンダーラインに英文を2文以上でも構いません。)

①Hello, everyone.
[]

②This is your reporter, Emily Walker.
[I have never visited a fireworks festival?]

③I'm here at the Midori River.
[]

④A fireworks festival will be held tonight. 1:3
[I don't think that I want you to come here.]

⑤I've lived in Japan for three years,
and I've loved Japanese fireworks since I saw them for the first time.
[I think you are free, let's go to a fireworks festival.]

↑上の欄が足りない場合に使いましょう。

Level.1	L2	L3	L4	Total
3	0	8	3	14

図2 記述シート

(2) 本研究の指導計画について

表1は本研究の指導計画である。書く活動を8時間とテストを3時間として計11時間設定した。使用した教科書はNew Horizon English Course 1・2・3 (株)東京書籍 (平成23年2月4日検定済)である。表の1~8回目は書く活動が何回目かを意味し、教科書はそれぞれBook 1・2・3とする。

表1 本研究の指導計画

時	内容	設問 及び タイトル
第1時 (テスト)	H25年3月実施 青森県学力検査 【青森県正答率: 28.2%】	設問2 (2) ジョンから、球技大会にむけて、みんなでバスケットボールの練習をしようと誘われたとき、あなたなら何と答えますか。15語以上の英語で書きなさい。文の数はいくつでもかまいません。
第2時 (1回目)	(Book 1 / p. 50) Unit 6 ベッキーのおばあちゃん	Part 1 人について紹介しよう ベッキーはクラスみんなに自分の祖母のことを紹介します。
第3時 (2回目)	(Book 1 / p. 82) Unit 9 ケーブルカーに乗って	Part 1 何をしているのかを描写しよう ナンシーと4人は、ユニオン・スクエアでメイ、ビンと待ち合わせをします。ベッキーがみんなの様子をビデオで撮影しています。
第4時 (3回目)	(Book 1 / p. 94) Unit 10 観光地から	Part 1 近況を述べよう さくらは1年A組のみんなへのおみやげに、英語でビデオレターを作ります。
第5時 (4回目)	(Book 2 / p. 14) Unit 2 A Trip to New Zealand	Reading for Communication 説明しよう ニュージーランドに到着した一郎。美しい山をビデオで撮影します。
第6時 (テスト)	H23年3月実施 青森県学力検査 【青森県正答率: 26.0%】	設問2 (2) あなたの学校に来た留学生に、あなたの身近な人を誰か一人、紹介することになりました。紹介する文章を15語以上の英語で書きなさい。文の数はいくつでもかまいません。
第7時 (5回目)	(Book 2 / p. 40) Unit 4 Homestay in the United States	Starting Out さくらは、夏休みにアメリカへホームステイに行きました。
第8時 (6回目)	(Book 2 / p. 74) Unit 7 My Favorite Movie	Starting Out 英語の授業で一郎が、好きな日本のアニメについて発表します。
第9時 (7回目)	(Book 3 / p. 14) Unit 2 A Fireworks Festival	Starting Out テレビの英語番組の「日本文化紹介コーナー」です。
第10時 (8回目)	(Book 3 / p. 44) Unit 4 Learn by Losing	Starting Out 英語で書かれた日本の観光ガイドの一部です。
第11時 (テスト)	H26年3月実施 青森県学力検査 【青森県正答率: 21.4%】	設問2 (3) アズサの将来の夢を聞いて、あなたならアズサにどのような言葉をかけますか。英語15語以上で書きなさい。文の数はいくつでもかまいません。

* 青森県正答率は青森県学力検査受検者の6点満点の人がしめる割合

(3) 実施するテスト

書く力の伸びを見るために、第1・6・11時にテストを実施し、生徒の変容を検証した。テストに使用

した問題は、平成23・25・26年3月に実施された青森県学力検査であり、設問2の条件英作文を用いた。入試後の受検者の分析結果を基に、回を重ねるごとに難易度が上がるように問題を設定した。

テストの採点基準は、青森県学力検査の採点基準に準ずることとし、以下ア～ウに示す。

ア 解答例以外でも、正しい文で内容が適切であれば、正解とする。

イ 15語未満であれば、3点を減ずる。(15語以上で書きなさいという設問の場合)

ウ 綴り、符号、大文字、小文字などに表記上の誤りがあれば、2か所につき、1点を減ずる。

その他の採点方法は減点方式を用いた。文法の誤りについては青森県学力検査では記述がないため、文法ミス1か所につき1点を減じた。語数制限に満たないものは、青森県学力検査の採点基準に準じて3点を減じ、1文書いてあれば1点、2文で2点、3文で3点から減点した。

表2 各グループへの手立て

与える手立て	グループA	グループB	グループC	グループD
整理・結合 ブレインストーミングシート	○	○	×	×
評価シート	○	×	○	×

(4) 本研究の二つの手立てについて

本研究では2学級を実験群とし、それらの学級をそれぞれ2グループに分けグループA～Dとした。与える手立ては表2のとおりであり、授業を行っていく中でグループAにおいて自分の考えを書く力が高まることを検証する。グループBの際は、定期テストの平均点を基に生徒を振り分けた。F検定でどのグループも等分散であることを証明し、その後のt検定でもP値>.05となるようにして、各グループに有意な差がないようにした。以下の、ア・イにそれらの手立てを示す。

ア 整理・結合ブレインストーミングシートについて

図4は整理・結合ブレインストーミングシートである。グループA・Bの生徒には、①に登場人物はどのような性格・様子かを想像させ日本語でメモをさせた。また、②の四つの欄には思い付く単語を分類して書き出させ、英文を書く準備をさせる時間を設けた。各欄の記入時間は1分30秒とし、計6分をこのシートに費やさせた。記入すべき項目は以下のとおりである。

- i) 左上「単語や文」と「動詞」
- ii) 右上「主語となる人物と代名詞 (→he, she, they など)」
- iii) 左下「動詞 (とそのつながり)」
- iv) 右下「単語のつながり (単語をつなげて左上の語を具体的に)」
- v) 四つの欄の下には「英文の作り方 (ヒント) 右上の単語+左上の単語+右下の単語(など)～」

シート記入後は、自分のペアと日本語で意見交換させて情報を追加させることで、場面状況の深化を図ろうと考えた。

イ 評価シートについて

図5は、評価シートである。そのシートを用いグループA・Cの生徒に各授業の振り返りをさせた。項目は以下のとおりである。

- ①時間内に英文を完成できたか。
- ②and, but, because, so, for exampleなどを用いて理論的になっていたか。
- ③英文レベル分けシートの【7】の接続詞を使えたか。
- ④書かれた文章の内容は、前後で意味が繋がっているか。
- ⑤音読の際、気持ちを込めて伝えるようにしていたか。
- ⑥主語と動詞の語順は成り立っていたか。
- ⑦主語に対する動詞は正確であったか。
- ⑧オリジナル文のLevel. 2を使えていたか。
- ⑨オリジナル文のLevel. 3を使えていたか。
- ⑩オリジナル文のLevel. 4を使えていたか。

評価点は①～⑦が4点、⑧～⑩が1点で、合計31点とした。授業後はアンケートから、生徒たちが評価シートを意識した取組をしていたことが分かった。評価シート下部には友人からのアドバイス・コメント欄、自分で次に目指したいレベルや文について考えを書く欄、そして自分で今日の学習についてのコメント欄を設けた。このようにすることで点数だけではなくペアが書いた感想に触れさせ、他者の気付きから再び学ばせる機会を与えた。生徒たちは自分やペアの文章を真剣に読み進めており、英文を読

図4 整理・結合ブレインストーミングシート

図5 評価シート

む量を増やさせることができた。また、授業の最初に評価シートを読ませ前時の振り返りをさせることで、自分の課題と目標が明確になるなど、評価シートが自律的学習者への一助を担ったと考える。

評価シートで生徒に特に意識させたのは、先述の②と③である。②は、どの生徒も簡単に実施することができ、同時に文を長くしたり文を理論立たせたりすることができるというメリットがある。③の接続詞はif, that, when, because である。主語と動詞の欠落が頻繁に見られる文法事項であるため、生徒により多くの英文に触れさせ、練習量を確保するために設定した。そのため、教師が評価シートを添削する際は、どちらにも積極的にコメントを入れて支援した。

以下に同一生徒が書いた英文を提示し変容を検証する。図6は、検証授業2時間目の記述シートである。用いた教科書の単元の見出しは「Book 1 Unit 6 ベッキーのおばあちゃん Part 1 人について紹介しよう ベッキーはクラスみんなに自分の祖母のことを紹介します」である。英文を組み込む際は生徒がベッキーになった設定で英文を書くべきなのだが、主語がI（私は）ではなくBecky（ベッキー）から書き始めており、主語を把握しきれていない様子がかがえる。図7は、検証授業3時間目の記述シートである。生徒は、初め「買い物に行きたいと思う」を「would like to shopping」と記述した。Student-teacher に英文の丸付けをしてもらった後、「would like to go to shopping」に訂正したが、評価シート図8を提出した時点では、自分の間違いに気付いていなかった。そこで教師が次の授業前に「go」の後の「to」は不必要であることを生徒に伝えながら、その授業で同じ表現を使うように指示を出した。すると図9の検証授業4時間目の記述シートの様に「I will go shopping」という文を書くことができた。その生徒は評価シート図10で、今日の学習のコメント欄に「go shopping」が書けたことに対する前向きなコメントを書いた。全11時間の検証授業終了後でも、その記憶が知識として身に付いており、英文として書くことができた。図11は、検証授業10時間目の記述シートであり、評価シートに基づいた英文の変容が見て取れる。例えば、評価項目の②や③のand や接続詞が用いられている点である。小さな成果ではあるが、積み重ねた練習があったからこそその英文である。また、文脈を意識して適切な英文を書けるようになったことも分かる。内容の変容は生徒によって違うものの、評価シートを用いて自分の成長を多角的に捉えることで、英文のフィードバックができたと考えられる。

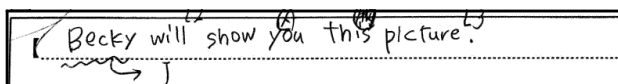


図6 記述シート（第2時）

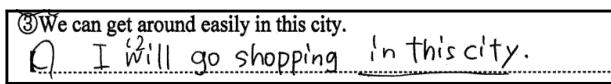


図9 記述シート（第4時）

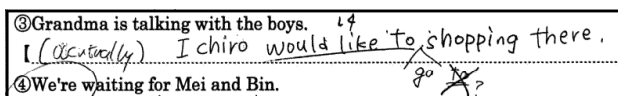


図7 記述シート（第3時）

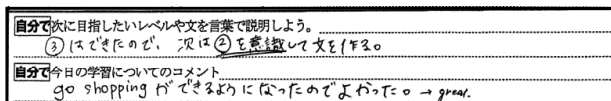


図10 評価シート（第4時）

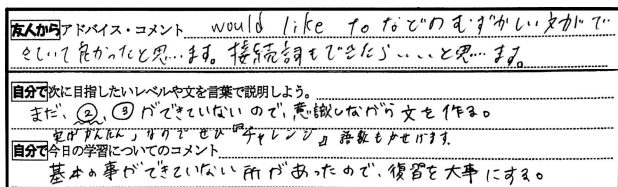


図8 評価シート（第3時）

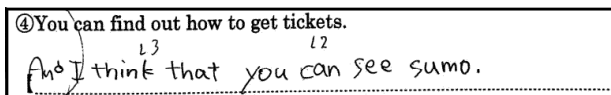


図11 記述シート（第10時）

3 考察

(1) グループ全体の結果

図12は、青森県学力検査での6点満点者とグループA～Dでの満点者の推移である。また、図13～16は各グループのテストごとの点数の人数推移である。

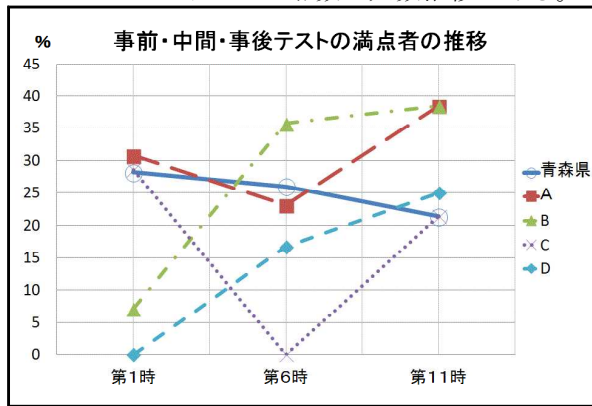


図12 青森県学力検査の6点満点者とグループA～Dでの満点者の推移

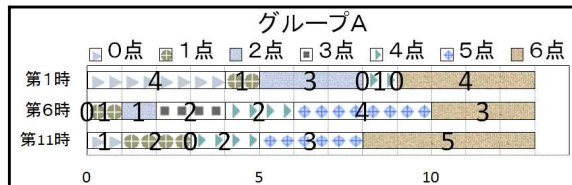


図13 グループAの人数推移

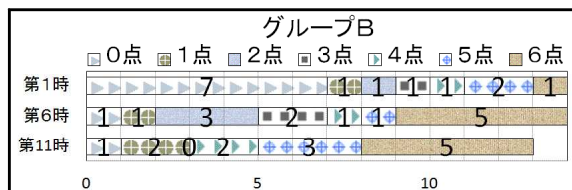


図14 グループBの人数推移

図12から、青森県学力検査では正答率が下降していくのに対し、グループA～Dでは回を重ねるごとに数値の伸びが見られた。同一グループ内で第1時テストと第11時テストをt検定を用いて比較したところ、グループA～DでP値<.05となり有意な差が認められた。また図13～16のように、満点者のみならず全体での点数の伸びが見られたことが分かった。第6時テストでグループA・Cでの満点者の割合が低いのは、他のグループよりも多くの単語を使おうとした生徒たちがおり、減点対象になる文が多かったと考えられる。その後は適度な長さの文でまとめさせたため点数が向上した。

(2) 手立ての効果

ア 整理・結合ブレインストーミングシートの効果

図17・18はグループA・BとC・Dでのテストの点数の人数推移であり、表3は検証授業での各項目の平均値である。それらを用い、整理・結合ブレインストーミングシートの利点を考察した。以下 i) ii) は図17・18, iii) iv) は表3からの考察である。

- i) 生徒が高得点を取る割合が高い。
- ii) 第11時のテストにおいて0～3点の人数を見ると、グループA・Bでは6名、C・Dでは11名と整理・結合ブレインストーミングシートを用いた方が伸び率が高い。
- iii) 単語と句が増加する。そのため、学力検査の条件英作文で「15語以上の英文で書きなさい」という設問にも、抵抗感なく臨むことができるようになると思われる。
- iv) 助動詞が多くなる。整理・結合ブレインストーミングシートに「動詞（とそのつながり）」の欄があったためであると考えられる。

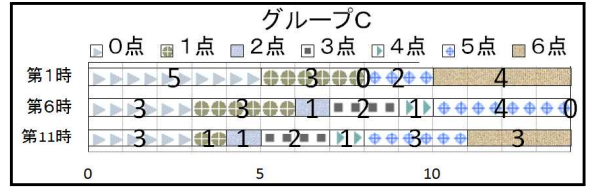


図15 グループCの人数推移

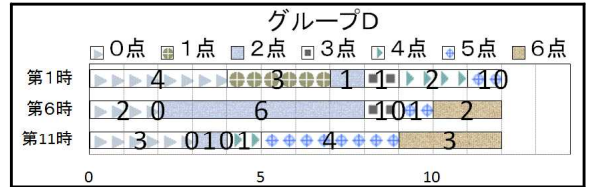


図16 グループDの人数推移

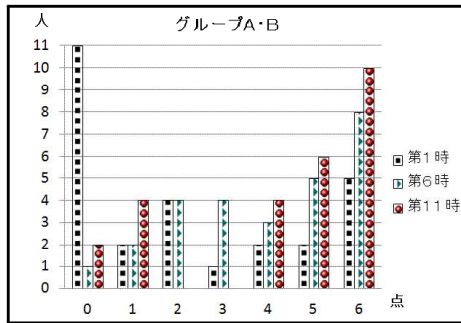


図17 グループA・Bの人数推移

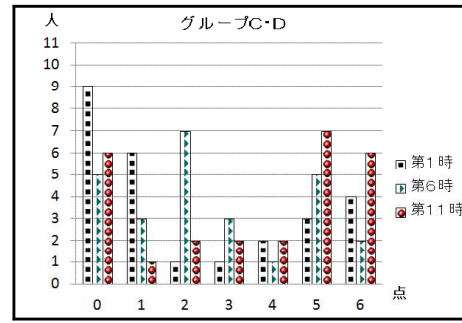


図18 グループC・Dの人数推移

表3 検証授業における各項目の平均値

	単語 (個)	句 (個)	助動詞 (個)	理論性 (個)	接続詞 (個)	Level1 (点)	Level2 (点)	Level3 (点)	Level4 (点)
グループA	21.8	2.4	0.8	1.1	0.9	2.8	0.9	3.1	3.3
グループB	21.2	2.5	0.8	0.5	0.6	3.0	0.9	2.4	2.7
グループC	16.5	1.8	0.4	0.8	0.8	2.7	0.6	3.1	3.0
グループD	17.9	2.1	0.5	0.6	0.4	2.9	0.7	2.5	2.2

イ 評価シートの効果

グループA・CとグループB・Dにおいて、評価シートの利点を考察した。i)～iii)は表3から、iv) v)は生徒の英文と検証授業の後に行ったアンケートからの考察である。

- i) 理論性のある文章を多く書くことができた。評価項目の②「and, but, because, so, for example」などを用いることで理論的になっていたか」があったためであると考えられる。
 - ii) 接続詞を多く使うことができた。評価項目の③「英文レベル分けシートの【7】の接続詞を使えたか」があったためであると考えられる。
 - iii) レベル分けされた英文シートのLevel. 3・4の文章を使う回数が増加した。評価項目の⑨・⑩「オリジナル文のLevel. 3・4を使えていたか」があったためであると考えられる。
 - iv) 徐々に生徒が書いた英文に変容が見え、教師の想定した英文に近付いた。
 - v) 生徒自身が自分の反省を短時間で見返すことができ、目標と課題が明確になった。そのため生徒の意識が変容し、自律的学習者としての第一歩となった。
- つまり、評価を一度のみではなく継続的に行い、生徒の伸ばしたい力を教師側が視野に入れ評価シ

トの項目を与えることにより、自分の学習状況を短時間で振り返らせることができ、目標と課題が明確になった状態で授業に臨ませることができる。それとともに「次はここまで頑張っていきたい」という学習意欲の向上が見込まれるなどの波及効果が期待できることが分かった。

表4は、事前と事後の意識調査アンケートである。質問内容は「自分の考えを英文で書くことに自信はありますか」評価項目は「1 そう思わない 2 あまりそう思わない 3 まあまあそう思う 4 そう思う」である。このデータからも、1・2の人数の減少、及び3・4の人数の増加が見られたため、生徒の意識向上とテスト結果は関連性があるものとして推測される。

表4 事前と事後に取った意識調査アンケート

	事前				事後			
	1 そう思わない	2 あまりそう思わない	3 まあまあそう思う	4 そう思う	1 そう思わない	2 あまりそう思わない	3 まあまあそう思う	4 そう思う
グループA	4人	6人	3人	0人	1人	2人	5人	5人
グループB	6人	6人	1人	1人	1人	1人	8人	4人
グループC	4人	7人	3人	0人	2人	2人	6人	4人
グループD	5人	6人	1人	0人	1人	1人	6人	4人
計	19人	25人	8人	1人	5人	6人	25人	17人

V 研究のまとめ

本研究の手立てである、整理・結合ブレインストーミングシートを用いたグループA・Cでは、テストで高得点を取る割合や0～3点での伸び率が大きかった。また、英文に用いることのできる単語や句、助動詞の増加など、自分の考えを書く力が備わっていった。単語や句などの増加は、文法事項の使用機会の増加につながったと考えられるものの、先述した中学校学習指導要領外国語編が内包する、自分の考えを論理的に読み手に書き伝える力の伸びにはつながっていかなかった。しかし、その欠如を評価シートが補ったと考える。例えば評価項目にあるand, but, soや接続詞などの増加で文章の論理性が高まった。またLevel. 3と4の英文の使用など、評価項目を満了した文が増加したということは、生徒が評価シートに基づき意識的に言葉を使ったことを意味する。その過程で、文法・語彙の必要性が分かり、知識と活用力のギャップを感じながら文法・語彙学習に戻ることで、英文の定着率が向上したと考えられる。つまり、3年間の文法事項を幅広い視点から見つめ、読み手に書き伝える力が伸びたことが示され、自分の考えを書く力が高まったことが分かった。

以上のことから、本研究では整理・結合ブレインストーミングシートと評価シートの併用が、自分の考えを書く力を高める有効な指導法であると推測される。

VI 本研究における課題

- ・整理・結合ブレインストーミングシートの活用で、単語の増加とともにミスが増えていく。生徒にミスは発生するものとして前向きに捉えさせ、同じ文法事項を積極的に使わせるなどの工夫をしなければ、自分の考えを英文で書く力の向上は望むことはできないと考える。
- ・整理・結合ブレインストーミングシートの活用で、句が増加した。それとともに「with friends」や、「in shop」などの前置詞の欠落が見られたため、句についての知識の埋め合わせが必要であった。
- ・評価シートの項目を点数化するのであれば、4段階評価ではなく2段階評価として、生徒の評価基準が曖昧にならないようにすることも考えていくべきである。
- ・評価シートの項目が多く何が大切なのか判断できなかった生徒もいたと考えられるため、生徒の実態を把握した上での評価項目の精選が必要となってくる。

〈引用文献〉

- 1 中学校学習指導要領外国語編 (H20. 3) 第2章 第9節
- 2 土屋澄男 1981 『中学校英語教育法』, p. 216, 図書文化社
- 3 太田洋 2012 『英語の授業が変わる50のポイント』, p. 9, p. 30, 光村図書出版株式会社
- 4 田中武夫 2003 『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』, pp. 242-244, 大修館書店
- 5 竹内厚志 2012 『英語授業改善への提言』, p. 80, 教育出版

〈参考文献・URL〉

- 太田洋 2007 『英語を教える50のポイント』 光村図書出版株式会社
 小室俊明 2001 『英語ライティング論 書く能力と指導を科学する』 河原社
 望月昭彦 2007 『新しい英語教育のために—理論と実践の接点を求めて—』 成美堂
 国立教育政策研究所 2013 「特定の課題に関する調査(英語:『書くこと』) 調査結果(中学校)」
http://www.nier.go.jp/kaihatu/tokutei_eigo_2/tyousakekka.pdf (2015.1.21)